第 1 章

総　　説

1　総　　説

1.　位置及び面積

本県は本州のほぼ中央に位置し若狭・伊勢・両湾の湾入により造られた地狭部にあたり大阪湾から若狭に至る低地帯の一部である。その面積は 4025.36 平方キロメートルでありその中央部に位置する琵琶湖の周囲 235.20 キロメートル面積 69.550.0 ヘクタールで本県の約⅙の面積を占めている。

方　位	地　　名	東　経	方　位	地　　名	北　緯
		度　分			度　分
極　東	神崎郡永源寺村大字茨川	136.27	極　南	甲賀郡信楽町大字多羅尾	34.47
極　西	高島郡朽木村大字生杉	135.46	極　北	伊香郡余呉村大字中河内	35.42
県　庁	大津市東浦一番町	135.52	標　高	93.0m	35.00

1.　地　　勢

中央部に北東から南西に陥没湖である我が国最大の琵琶湖が長く横わり四囲は高い山々で包囲されている。即ち東は伊吹、鈴鹿、西は比良比叡の両地塁山脈がほぼ、南北に走り北は江若山塊で福井県と境し南は信楽山地によつて伊賀盆地に接している。以上の様な地形の為河川は悉く周辺に源を発しあるいは扇状地を作り或ひは近江の穀倉と呼ばれる三角洲地帯を作りつつ琵琶湖に注ぎ入る。

湖盆に流入した水は瀬田川・宇治川・淀川・となつて大阪湾にそそぐ一方疏水が運河となつて京都盆地に流れ去る。

湖岸線は概して単調であるが北岸の海津・大崎・永原及び塩津附近は沈水地形をなすため景勝の地として訪れる人々が多い。湖底は西側が比良断層崖に向つて急傾斜しているのに対して、東側は緩傾斜をなしている。

1.　地　　質

本県の地盤を構成している岩石は秩父古生層、第三紀層、第四期層に属する推積岩、花崗岩、輝緑岩、斑岩の火成岩類と小地域に露出している変成岩の三つに区分される。

周囲の山地は秩父古生層からなり特に石灰岩、白雲岩等この層に属する岩石は伊吹山、霊仙山近辺に広く分布しセメント工業の発達を見ている。

近江盆地内にある秩父古生層は花崗岩上の屋根垂れとして石部町から田上山附近に残存し所々に変成岩がみられるのは之に因るものである。

ムカデの伝説で古くから知られている三上山は古生層の岩石が花崗岩のため変質をうけて硬くなつた部分であり又近くの菩提寺山の石灰岩に接触鉱物硅灰石が出来ているのは石山寺の硅灰石の生成と全く同じであろう。

琵琶湖の西方の近江舞子、小松村附近及び湖南の田上山から甲賀郡三雲地方にかけて花崗岩が露出しているが、風化作用甚しいため禿山をなし、これがため風化生成物は直接周辺の水田に搬入され、その及ぼす影響がきわめて大であるので関係当局は、防止に鋭意努力中である。

本県の金属鉱床中主なものは銅と満俺の両鉱床で前者は伊香郡木之本町の土倉鉱山でその生産量の多い事と良品質の点は本邦でも屈指で、大いに嘱望せられている。

之に対して満俺鉱床は古生層中に、レンズ状又は厚薄不明の層状をなし、県下各地で採掘中であるが、いずれも大鉱床ではない。ただ栗太郡栗東町の五百井鉱山は特種の鉱床型をなしている点で、識者間に知られ満俺の外に石英脈には少量の亜鉛や鉛を伴う外、時には金を含有することがあると報告されている。

この外非金属鉱床として特筆しなければならないものは信楽盆地に無尽蔵に埋蔵されているといわれている粘土で、その加工品である信楽焼は本県の特産として広く海外にも知られている。

1.　気　　候

本県は我が国中央部の地狭部にあり四面山脈に囲まれ中央部は県の総面積の約六分の一にあたる琵琶湖があるため気候はきわめて複雑な変化を現わす。即ち夏期は表日本型の気候、冬期は裏日本型の気候となり、又県の南北両部につい

ても大きな差を呈し、海洋気候、内陸気候等の特殊性がある。しかし気候因子の各要素についてみれば他県に比較し概して中庸の地帯となつている。

県下の気象状況を地域的にみれば平年気温は琵琶湖を中心に湖辺地帯が14度余りで湖北、湖東の山沿ひ地帯は12度から13度で特に湖北県境附近は11度となつている。昭和29年度の地域的変化は平年と大体同様であつたが、湖南西部及びその周辺は15度を超えた。

降水量の平年値は湖北、湖西、湖東、の山間地帯に多く、年平均 2,200 粍から 2,400 粍を観測し特に湖北県境附近は 3,000 粍に達する。少い地域は琵琶湖中部以南及び県南平野部で平年 1,5000 粍から 1,600 粍となつている。昭和29年度は地域的の変化傾向は相似していたが、山岳地帯は 2,400 粍から 2,600 粍程度であつた。風についてみると県下一帯に概して局部的な渦動が起り易く、風向はまちまちで風力も概して弱い事が特徴である。風向頻度の平年では湖北、湖東地方は北西の風湖南西地方は南西風が多い。

昭和29年度の季節的変化をみると寒候期（１・２・３月）は暖冬型に経過し、従つて積雪量も少く、春の訪れが早かつた。梅雨の入りは６月２日梅雨明けは８月２日と平年より梅雨期間は長く、特に気温は２～３度低目の異常低温を示し近年稀な梅雨であつた。８月・９月共に高温で台風による風水害も軽微で又雷雨も極めて不活発であつた。

即ち６・７月の台風は本邦には影響なく８月18日～19日の台風５号、９月８日の台風13号、９月13日～14日の台風12号、９月18日の台風14号、９月26日の台風15号の影響があつたが本県では大した被害はなかつた。雷雨も彦根で６回観測したに過ぎなかつた。10・11月の秋期は高温寡雨に経過し天候は極めて良好であつた。又12月に入つてからも割合に暖かく、各地の初雪も大津、彦根、木之本、今津等で12月13日で平年より４日乃至12日も遅く暖冬を思わせる様な冬の訪れであつた。

産　　業

昭和29年の経済状勢はデフレ政策の影響などにより概して低調であつた、ただ農業が昭和28年の風水害から立直つて生産が上つたことが目立つている。

昭和28年度以降政府によつて堅持されて来たデフレ政策は朝鮮動乱後膨脹した日本経済を引締め今後の正常な発展への足場を作つたのであるがその反面景気は下向きとなつた。このような全国的な傾向は必然的に本県経済にも影響し昭和28年までは毎年顕著な上昇を示してきた工業生産の上昇趨勢が鈍化し昭和29年の本県経済は総体的にみて沈滞気味となつた。

次にこれらのことを所得の面から本県の産業構成についてみると農業等の第一次産業は対前年度比より０.７％増の29.６％製造業等の第二次産業が前年より４％減の33.６％、又卸小売サーヴイス業等の第三次産業も前年比より0.3％減の36.8％となり農林業等の第一次産業の比重の割合が増大し第二次産業及び第三次産業が夫々デフレの影響を受けこれと反対に減少したことは本年度の特徴であろう。さらに産業構成について全国と比較すれば第一次産業が全国の21.5％に対し本県では29.6％又第二次産業が全国の30.8％に対し33.6％次に第三次産業では全国の48.2％に対し36.8％となり第一次、第二次産業の比重が全国よりも相当高く逆に第三次産業ではいちじるしく低くこのように本県の産業構成は全国に比べその健全性がうかがわれよう。

財　　政

本県の財政については当初国の緊縮耐乏予算に呼応し極力消費的経費の圧縮により編成されたものであるが警察行政の県移管及び国の補助額特に公共事業費の決定に伴ひ昭和29年度の一般会計才出決算額は、6,546,977,619 円であつて戦前昭和10年の7,538,730円と比較すると約868倍にあたるが今戦前戦後の物価変動を総合物価指数で考慮して、これを昭和９年～11年時と比較すると約2.38倍と大きく膨脹している。

これらの膨脹要因は種々考えられるが先ず 149,744 人の人口増加並びに戦後の諸制度の改正により各種行政委員会、人件費、生活保護費等の義務的経費及び公共事業、国庫補助事業等の国の施策に伴う経費等の財政需要の増加によるものと思われる。一方市町村財政についてみても昭和29年度才出決算額は 4,558,020,000 円であつて、これを前述の県財政と同様物価指数で考慮すると約 1.5倍に当り県財政の 2.38倍に比較すればややその膨脹率は低いがこれも県の場合と同様財政の膨脹と考えて差支えないであろう。